

虫歯をほうっておいたら、眠れないほど痛くなったので、大決心をして歯科通いをはじめた。その歯科は隣町にあり、歯科医が3名、診察台が8台、歯科衛生士、技工士、看護師さんは10数名もいて、活気のあるといっちは変だが、だれもが生き生き働いている歯科医院だ。〈患者さま〉などという不自然な呼び方はしないし、スタッフと患者の会話がローカルで温かく、またスタッフ間の連絡が実に密で、おまけに診察台の目の前に大富士がそびえる、医療現場でなければなんとも心地よい空間だ。

治療がていねいなため、予約していても15分から1時間待つのだが、待合室での緊張感と恐怖心が、毎回悩みの種だった。とくに抜歯予定日の朝など、できれば全身麻酔をかけてもらいたいほど、頭の中がパニックになった。

待合室にテレビはあるが、民放のワイドショーはさらに気がめいるし、雑誌は若者向きで面白くなく、文庫本は夢中になれば名前を呼ばれても気づかない危険性がある。

いろいろ試した末、待合室で自分が一番落ちつけたのは、このコラムの推敲だった。だいたい600字から800字なので、全文がじゅうぶん頭にはいっている。言葉の言い回しや段落の差し替えなど、目をつぶりながら、はめ込んだり、抜き取ったり、忘れそうな単語はメモしたりと、クロスワード・パズル みたいに、集中することができた。

ときどき受け付け嬢と目が合って、にこっとした瞬間に、つかまえたばかりの単語がふっとぶこともあった。そんなときは、また目をつぶって、歯科の玄関からイメージのやり直しをすると、運良く蘇えることもあるし、行方不明になったきりのもある。

さて、半年間にわたる歯科通いがもうそろそろ終わる。さいわい次の医療機関を見つける必要はないのだが、待合室だけはどこかに見つけなきゃと考える、きょうこのごろ。